四徳誌

――在りし日の冬の四徳集落――

南の空はまだ吹雪いているが、
雪荒れの止んだ桃源郷の夕暮れは
美しく澄んでいる。(昭和25年頃の冬)

部落の中央部付近、農協支所倉庫より下方
中村部落から分教場、福泉寺、植弥山、下
村方面をのぞむ。

災害前の四徳のプロフィール

折　草　峠
峠を登りつめると高尾山神社があった。陣馬形の山なみものぞむことができる。

スリップをして停車したバスと車掌さん。

雪の峠路を登るバス

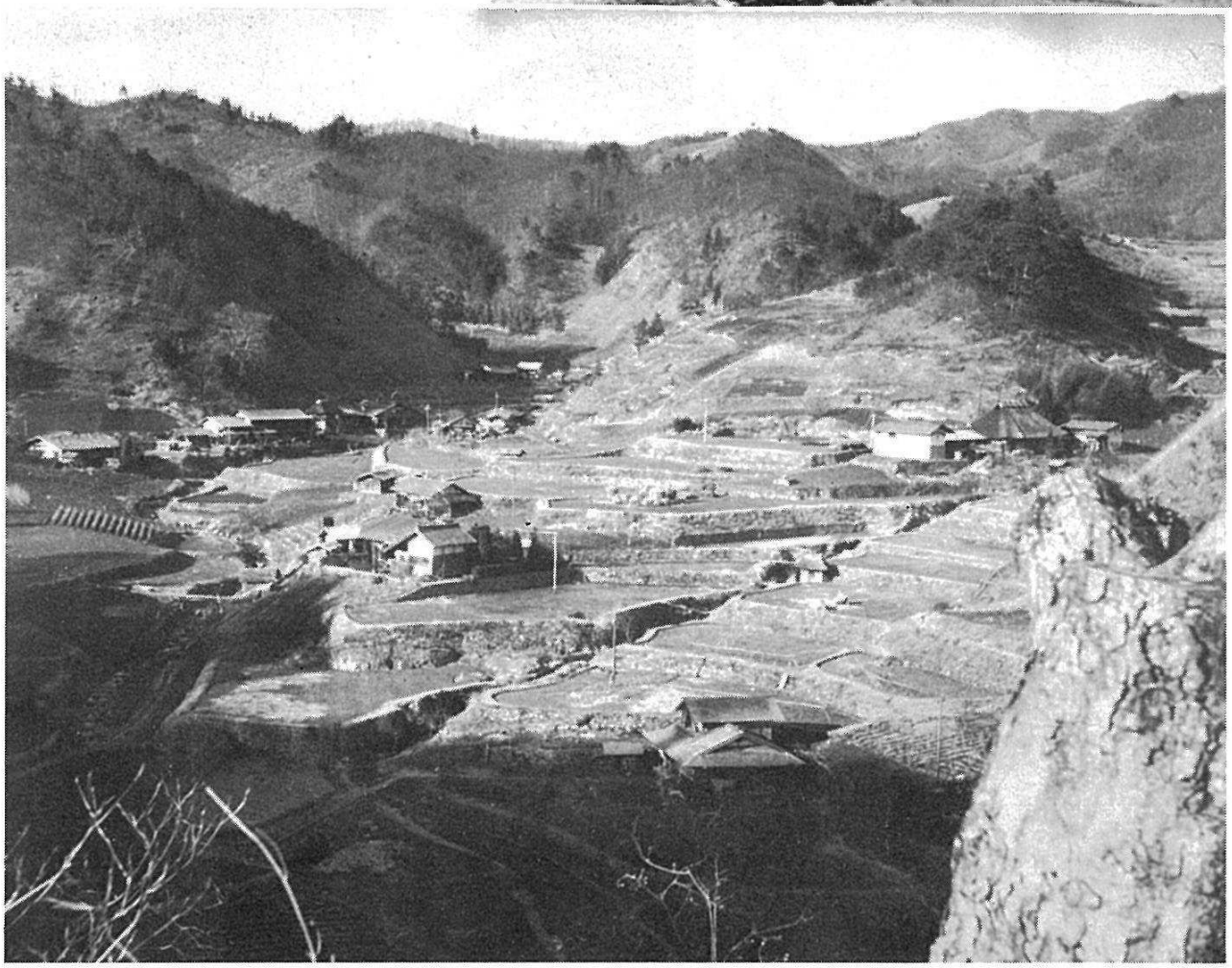
中村から川西、上流を見る

川沿いに立ち並ぶ人家。

災害前の四徳のプロフィール

川ぞいの集落（農協支所付近）

中村境より、上流大張入口付近を見る。



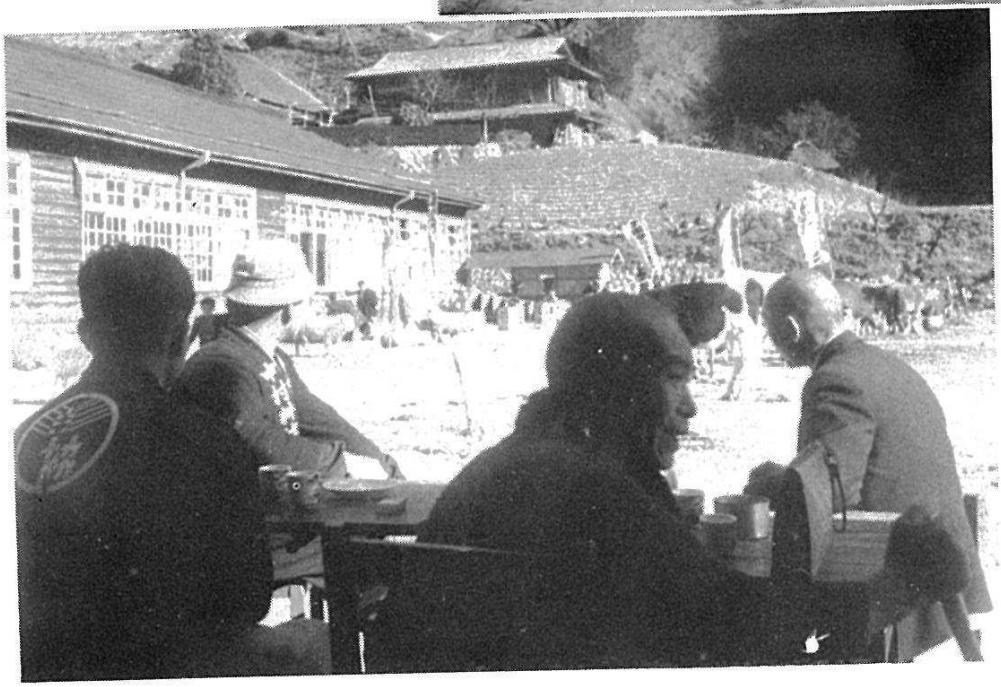
棚田の見える風景（大張耕地付近）

雪の朝（農協支所前）

大雪の朝、丁場の雪かきをする人々。

秋の運動会

なごやかな部落総出の大運動会の借物競争のスナップ、一着。



家畜品評会

乳牛、役牛、緬羊山羊など分校校庭はいっぱいの家畜の群れで占領されてしまった。

無住地帯となった現在の四徳

折草峠の頂上

峠　路

出るにも、入るにも必ず通らねばならなかった、部落の人々の足跡の深く埋もれている懐しい峠路は人影もない。

峠をおりたこの道の東側は平鈴の部落だった。

平鈴の道

部落の中央にあった中村耕地跡。道路の左右にあった家並みは落葉松林と変ってしまった。

中村の道

祖弥山の見える路

下村部落の中心地、祖弥山のただずまいのみは昔と少しも変っていない。

下村の道

下村の中心部より下方の樽坂方向を見る、川瀬の音のみ静かで「アメノウオ」も散見する。

災害ですっかり埋ってしまったけれど雨乞淵付近のたたずまいは昔のままをつたえている。

雨乞淵付近（樽坂入口）

想出多い、昔の樽坂の悪路は人が住まなくなってから、こんな立派な道に生れ変った。

樽坂の道

四徳鉱泉跡から眺める県道には人影は全く無い。

昔の村の中央部付近（湯の沢より見る）

路傍に残る庚申塔（大張耕地跡）

静かにたたずむ石塔は、むしょうに人くささをおぼえる。

第四章　三六災と四徳

僅かな耕地と、四囲を取り囲む山林にへばりついて生活をしてきた四徳の部落は、名実共に伊那谷における辺境であり僻地であった。

その一面、見方によっては桃源郷であり、歴史のある山里でもあった。

その桃源郷を一瞬のうちに壊滅させ、無人の荒れ里にしてしまったのが彼の忌まわしい昭和三十六年六月の梅雨前線豪雨である。

歴史的に見ると、四徳における豪雨による洪水禍（満水）はこれまで数限り無く繰りかえされており、度重なる被害を受けながらも、その度に部落の人々はその被害にめげずに立ち上り復興に努力して郷土四徳を持ちこたえ発展させてきたのである。考えてみるとこれまでの災害は被害を乗越えて立ちあがる余地を、何時も天は住民に残してくれる慈愛があって、その恩寵にすがって六百年余の生活の営みを続けてくる事ができたのである。

併し、今次の三六災は、これまでと異なりその恩寵をも全くもぎとり、何物にも縋る余地を与えないほど残酷極まりない横暴ぶりであった。頼るすべを無くした住民は掃き出されるような姿で四徳の谷を出て四散してしまい、住む人のなくなった故郷は祖先の人々が住みつく以前のような太古の姿に戻ってしまったのである。

狭い日本の国土の中で、四徳のような特色をもつ小さい山あいの集落が存在する事の意味は大きく、このような集落の生活はいつまでも末永く残すべきであるという事を思うにつけても、無住地帯とならざるを得ないという事は極めて残念な事である。

四徳から、すべてを根こそぎ奪い取ってしまった魔のような三六災の実態を、できるだけ詳細に次に、書き残したいと思う。

四徳川下流、下村付近の惨状

一話　梅雨前線豪雨の概要

「気象と雨量」（一九六四年一月「中川村災害誌」に依る

昭和三十六年（一九六一）六月初旬、中旬は晴天が続き梅雨模様は見られなかった。しかし高層の高気圧が二十三日頃から急激に弱り始め、本邦の南岸沖に弱い梅雨前線が発生し、二十四日は九州南方の弱い熱帯性低気圧の影響も加わって午後から四国南部に強い雨が降りはじめた。

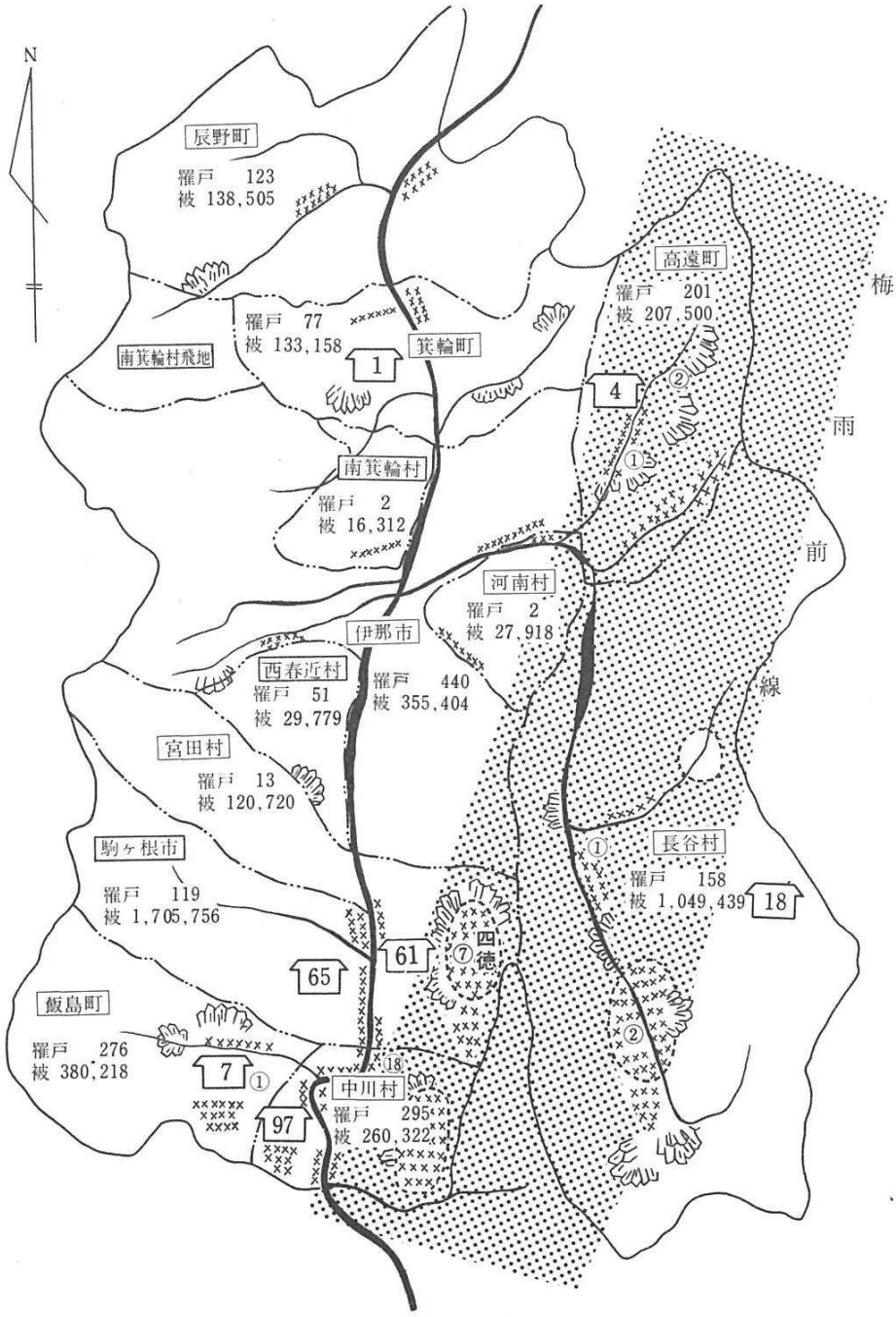
二十五日には強い雨の地域が紀伊半島南部に移り、この地方から早くも水害のニュースが伝えられてきた。

二十六日、梅雨前線は、関東から東海、近畿、四国を結ぶ線に延び、強雨域は西から東へ波及したところへ、二十六日夜半ごろから四国南方にあった台風六号の影響が大きく加わって梅雨前線は著しく活発になり、強雨域は徐々に北上した。

伊那地方は二十六日午前中は並雨、その後小雨となったが、大雨必至と予想され、十七時四十五分大雨注意報が発令された。

二十七日は今回の豪雨期間中最も広い範囲に強い雨の降

上伊那三十六梅雨前線豪雨被災図



被	192				㉚
被害金額	住家の全壊流失	孤立した地帯	林地の崩壊	水路耕地の欠壊埋没	死者、ゆくえ不明者数

った日で、台風六号の東側を北上した南方の暖湿空気の影響で強雨域は伊那谷全域を包み、正午頃から、が然猛威をふるい集中豪雨の様相はものすごいものとなってきた。

二十八日には気圧の谷は東に抜け、梅雨前線は一時的に南にさがり、大雨になり易い気圧配置は余り変らない所へ、夜になって新たな湿舌がやや東によって入ってきた為に県の南東部に集中豪雨を降らせ、諏訪湖を氾濫させた。二十九日以降、梅雨前線は次第に北上して天候は徐々に回復に向った。

飯田測候所では、二十六日の零時から三十日の十四時までの連続降雨量は五〇〇ミリメートルを測定し、開所以来の最高となり、被害に最も関係のある日の雨量は、二十七日午前九時から二十八日午前九時までに、三百二十五ミリメートルの大記録となって、伊那谷では始めての事であった。

中央構造帯と言われる赤石裂線の地穀、花崗石、片磨岩系の崩壊し易い地質、戦中戦後の材木の濫伐、そこへ連日の豪雨がせきを切ったように一度にどっと荒れ狂い、川という川、谷という谷、山の傾斜面悉くが土砂のなだれ、濁流の氾濫となって最大級の災害を本村に与えたのである。

雨量の正確な観測記録を見ると次表のようである。

（ミリメートル）

観測所＼月日	6月24日	25	26	27	28	29	30	7/1	計
飯田測候所	二九	二一	七三	三三五	五三	二八	三三	一四	五七五、〇
中川東中学校	二八、七	三七	六〇、九	二七九、五	七五、六	四六、八	七、四	七、四	五四二、三
中川西中学校	二八、八	一三、三	六一、五	三一〇、二	六六、八	三五、二	六、五	六、五	五三八、五

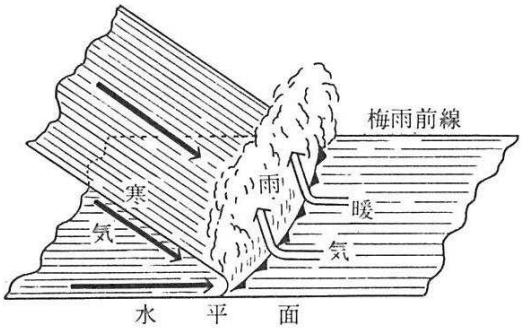
「豪雨の道すじ」

この時は全県にわたって被害があり、わけても伊那谷の被害が最もひどく、どの市町村も手ひどく痛みつけられたが、まさかと思っていた溪谷の、ふだんは川とも思えない箇所や、水害には無縁と思われていた山中がひどい惨禍をこうむるとは夢想もなし得なかったことである。

恵那山を通過した梅雨前線集中豪雨は、先づ飯田市の伊賀良地区を荒らし、松川、野底川を本流化し、上郷、座光寺をなめ、高森町の市田、山吹を奈落の底に突っこみ、このあたりから豪雨の主脈は、天竜川を東にこえて大鹿村の北川、北入を無惨に圧しつぶし、ついに中川村に侵入して陣羽形の南麓、大嶺山の西麓、四徳川の峡谷を見る影も無く荒しまわって、その余威をかって、駒ヶ根市中沢の新宮川の本支流を荒し、更に戸倉山を突破して長谷村にとどめ

をさしたのである。上伊那郡下における梅雨前線の通過地域は前図（梅雨前線豪雨被災図）のようである。

図 (1)



（信毎36．7．6より写す）

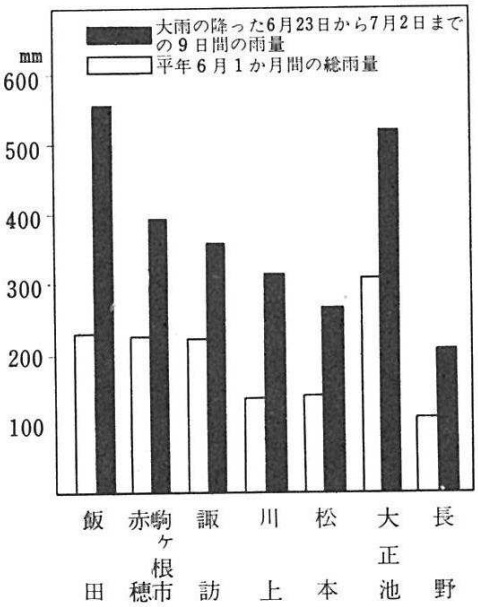
この度の梅雨前線集中豪雨がなぜ降ったのかという事については、右図の(1)図の示すように、南方洋上に発生した台風六号（中心示度九九六ミリバール、中心の最大風速一五メートル―二七日午後三時現在）によって、南方の暖かい湿った空気が吹きこまれ梅雨前線にぶつっかった。

梅雨前線の北側には冷たい空気があり、これに暖かい六号台風の気流がぶっつかって、激しい上昇気流を起し、その下の部分に大雨が降ったのである。

この南からの暖気流は幅が狭く帯状に流れこみ梅雨前線にぶっつかったその部分だけが大雨となったのであると、今度の集中豪雨の原因について気象庁の係官が説明をしている。

尚、現在の気象学では、この暖気流を事前に把握する事は殆んど不可能であり、その為に集中豪雨の予報が困難であるとつけ加えて説明をしている。

図 (2)



この梅雨前線の集中豪雨の降雨量がいかに凄まじいものであったかという事を図(2)で見ることができるのである。飯田及び駒ヶ根市赤穂の降雨量を見ると、平年の梅雨期に当る六月の一ヶ月間の降雨量が平均して約二三〇ミリ前後であるのに、今度の六月二十三日から十日間に降った雨は約五百ミリを超え平年の一ヶ月間の降雨量の二倍以上を示

している事がわかり、その量が想像を絶するものである事がわかる。

極地的に見ると、中川村の大草にある中川東中学校の観測によると、六月二十四日より六月二十七日までの四日間の降雨量は四一三・八ミリメートルであり、特に大被害の発生した、六月二十七日の一日の降雨量は実に三一〇ミリメートルを超えるという驚異的なものであり、これはおそらく有史以来の大記録ではないだろうかと推測されるのである。

この驚異的な降雨量を示す大草地域より、更に、梅雨前線豪雨帯の内側に当る四徳地域の降雨量はこれ以上である事がわかり、六月二十七日の一日降雨量は四〇〇ミリメートルを超えていたのではないかとも想像される。

二話　四徳区の被害状況

村の中心地区の大草より更に東に位置して豪雨帯の中心部に近く、高い山に四方をとり囲まれた地形などの諸条件によって四徳部落に降った雨の量は記録には見えないが相当のものであった事がわかる。

戦前から戦後へかけて盛んに行われた薪炭の生産や、用材の伐採などによる山林の濫伐に併せて、地質的に脆い地肌であるという悪条件の四徳の谷間に、一度に五〇〇ミリメートルを超す豪雨が降るという状況は、大災害が発生するすべての条件を完備してしまい、夢にも思わなかった大惨事が展開するということになってしまったのである。

六月二十七日の午前は降り続いていた雨も止み小康状態となったが昼食時の前後から俄かに豪雨となり、次第に雨量の増加した午後一時三十分頃より、四徳川の水量が急激に増加し始め、川沿いの耕地や道路の決壊が次々に発生しはじめた。

次第に増加する濁水は黒味を帯びた土砂流土石流となり、生臭い異様な臭気があたり一面に漂いはじめ、平素の流量の十倍以上にふくれ上り川全体が生きた魔物の荒れ狂うような感じに変っていった。

大川のみでなく、支流の小川や溝川なども次第に増水し、方々の洞や、沢から鉄砲水が次々におし出し、その鉄砲水が本流に流れ込む度に本流は水量を増し、立木、大岩、土砂などの夥しい物量の混った巨大な魔物のような流れに変り、その怪物のような巨大な土石流の流れは、想像もつかない猛威を振った。周辺の耕地、道路、橋梁は勿論のこと、

人家の多くを呑みこみ、狭い谷間のすべてを叩きつぶしてしまった。

三時を過ぎる頃になると魔物のような大洪水は愈々猛り狂い、川沿いの家屋の流失が到る所で発生した。橋梁は殆んど流失し、道路はずたずたに寸断され、四徳全体が、小さい集落毎に全くの弧立状態に陥ってしまった。逃げ場を失った小部落の人々は、近くの山や尾根に命からがらかき上り、雨に濡れながら荒れ狂う鉄砲水を呆然と眺めているばかりであった。

煙るような靄の中に、向い合いの山肌や尾根にへばりついて難を避け合っている人の群れは微かに散見するけれども、荒れ狂う洪水の為にどうする事もできない。鉄砲水の中に見え隠れ流されていく、家屋や家財、家畜などを無感動で眺めているうちに時間が過ぎ、悪魔の意のままにすべてを任せてしまったのである。

夕暮れが迫る頃になると、川の水量は更に増加し、川の流れというよりは、小山を包みこんだ土石流という姿になり、山のような巨岩がその土石流の表面に見えかくれして流れ下るようになり、靄の立ちこめた四徳の谷全体に生臭い異臭が漂い、谷を埋めつくした土石流の中で岩と岩がぶっつかり合う、鈍い重い音が響き合っている。夜になると、山なぎくずれにあって圧しつぶされて火災が発生したのか、どす黒い焔と黒煙と異臭が更に加わり、眼のとゞく、山の尾根尾根には、避難している場所の存在を知らせ合い、確め合うための懐中電灯の合図の灯が点滅するなど、全く生地獄絵図そのもののようであった。

殆んどの人々が二十七日の夜は、安全な逃げ場を近くの山に求めて逃げ、山肌や尾根に、雨の中を互いに肩を寄せ合って、嵐の音を聞きながら濡れ鼠のようになって眠られぬ一夜を過したのである。

二十八日の朝を迎えて見ると、部落の様相は全く一変していた。そこにあったはずの家が無く、青々と伸び育っていた美田は泥と岩石の河原と化し、僅かに残っている緑が眼に痛いように感ずる無惨な姿に変り果ててしまっていた。

その頃になると風の便りで、不確定であるけれども、死者や重傷者が下村方面に多数出ており、特に中村から下の被害は大きく、四徳全体が全滅的打撃を被ったということがわかるようになった。

この短い一昼夜の中に四徳の被害は激甚であり、その被災状況は次の通りである。

(一)　不幸にして死亡された方々

[redacted]

[redacted]

(二) 重傷を負われた方々

[redacted]へリコプターで、赤穂、松川の病院へ急送された

(三) 家屋の被災状況

（被災前は八四戸、人口四三四人）

被災戸数六一戸、人口三〇四人

流失　四八戸　二三七人

全壊　四戸　二六人

半壊　九戸　四一人

(四) 被災した耕地

（被災前の水田二二町八反六畝十五歩
被災前の畑　二九町四反六畝十歩）

水田　七町三反九畝十九歩

畑　七町二反　十三歩

(五) 被災した公共建造物

四徳分教場―四徳川の本流の直撃を受け半壊流失し全部土砂に埋没する

教員住宅埋没する

四徳農協支所―僅かに一部を残して流失

四徳診療所―流失

四徳鉱泉―半壊

福泉寺―流失

今次の集中豪雨の際に、中川東中学校で観測した降雨量の五二三ミリメートルという数値は、中川村の地表面の全体に厚さ五二・三センチメートルの水を張りつめる量であり、約一、七尺の深さで村全体を覆ったと同じ事になると計算される。

一立方メートルの水の重さを約一トンとすれば驚くべき水量と重量が地表面にかかることになり、山の傾斜が八度から三六度位の所にこの水量と重量がかかると、その破壊力はダイナマイトなどとても足元に及ばない大きさであると言う事である。

それに加えて、土砂や、岩石の混入した土石流は真水の場合の約二、五倍以上の重量があり、その破壊力は莫大なものとなるのである。

この土石流となった鉄砲水が、各洞々をものすごい勢力で切り削っていったのであるが、例えば、大張の釜ヶ平洞を流れる番場入川の鉄砲水の現状を見ると、二十七日の午後二時頃から午後六時半頃までの約四時間半の間に、約十八回の鉄砲水を数える事ができたので、凡そ二十分間に一回の鉄砲水が出た事になる。

鉄砲水は平常の川面より約五～六メートルも水面がもり上る程膨張し大量の土石流が流れ下るもので、鉄砲水のくる約二〇分位前からは川の水が殆んどせき止められて無くなり、暫くすると異様な地鳴りと爆音を伴って、灰褐色の水煙を巻き上げて大量の土石流が流れ下る。

時によっては、ふくれ上った土石流の表面には、山肌をそっくり切り取ったまゝ、杉や松の立木が直立した小山がそのままの姿で圧し流されてくる事もある。

このような鉄砲水が轟音と共に流れ下り、そのさい、一度の鉄砲水は川の両岸を五米以上も削り取っていく事も度々観察されその破壊力のものすごさは筆舌には尽し難いものである。

次に、災害当時の生々しい実態を伝える被災者の手記や新聞報道記事の一部を紹介する。

(一)　[redacted]君の手記（原文のまま）

「醇朗」鋭い声で呼んだ父、ただ気なしで返事をしていた。「学校の方が安全だから学校へ来い」と言うのだった。

何も出さなくていく事もあまりだったからスタンドとオルゴールも持って学校へ行った。五時頃だった。

もう既に電気は消えていた。給食室で先生達が夕食をたべていた。ローソクの炎で食べるのも幾日ぶりであった。食べるのもきちんとすわってたべるわけではない外を見ながら立ったまま食べた。

突然、新屋という学校より三〇メートル上の家が倒れるのを見るやいなや、すぐ最も安全な一番東の方の教室へすぐ逃げる仕度をしていった。危ければすぐ逃げる体制をとった。けれどあまりのこともないので布団をひいて寝るという事だった。

給食室から持ってきたソーセージを食べながらハーモニカを吹いていた。けれど、たまあに起きては僕の住宅を見た。学校が流れなければ流れないと思った。

十時頃、下の方の寺村の家が燃え始めた。この災害に火事を出すなんて、よけいに恐ろしさを受けた。

十二時頃、学校が危くなってきたので、学校より一段上

の、宮の前という家に行った。その頃の事なんか何も書き表わせないような恐ろしさだった。

それでもその家で寝た。もちろんろくには寝れなかった。

二時頃、状況を見ていた父が、そばの家が流れているので危いから山へ登るということであった。

雨のじゃんじゃん降る中を、宮の前の上の山の頂上を見上げて登った。何も見えなかったそれこそ地獄の底に落ちたようだった。

朝の明けるのを待った。四時頃うっすらと明けてきた。雨もすでに小降りであった。ようやく下の方が見下ろせる位明るくなった。

田畑という田畑はみんな流されて、家も数える位しかなかった。学校があったので、住宅も大丈夫だろうと思ったが住宅は影も形も無くなっていた。

学校は、木や砂、川木で埋まり窓もこわれていた。

ただぼんやりと眺めていただけであった。日本の地形が変りはしないかと思った。歴史はくり返すというが、もうだめだろう。

註

[redacted]君は当時の四徳分校主任[redacted]の子供で当時、分校の校庭の南下の教員住宅に父と住居していて六月二十七日の災害に遭遇したのである。

四徳分校付近の六月二十七日夜の被災の情況がよくわかる。

夕方学校の北上の石原の「新屋」の[redacted]宅が流され、夜になって学校が危険になってきたので、学校より県道を隔てて道上の「宮の前」([redacted])へ避難し更に夜になって、「宮の前」も危険になったので上の山に登り雨の中をまんじりともせず、この世の生地獄のような体験をしていた様子が書かれている。文中に夜になって寺村の方で火災が発生したと書かれているが、寺村の[redacted]宅が西上の山津波におしつぶされて火災になった時の事であろう。尚この時の山津波によって、[redacted]及びその家族と関係者が遭難死されたのである。

夜明けに見た学校は四徳川本流の直撃を受けて、土砂や流木で半分以上埋没し、頼みの住宅も流されているという惨状であった。この時の感情を「歴史はくり返すというが、もうだめだろう」とのべている。

(二) [redacted]さんの手記(原文のまゝ)

きょう川の水が多くなりました。きゅうしょくをたべていたら、ちむらせんせいがきて「小さい人はさきにかえっ

たほうがいい」といいました。

そして、おとうさんやおかあさんがおおぜいむかえにきました。

うちへかえったとき、ふみえはなきだしました。わたしと、ふみえは、たんすからふたりのきものを、ふろしきへつつみました。

ランドセルをしょって、だいどころにすわっていたら、おばあちゃはなんとかいっておがんでいました。おかあちゃは、「おとうちゃはやくこんかなぁ」といいました。

「えんの下へ水がはいってきた」とおかあちゃがいったとき「みんなお宮へにげろ」とおとうちゃがかえってきていいました。

おばあちゃは、「おじいちゃはやくおいで」といいました。くらがながれるといって、おかあちゃたちはくらからだしたり、うちからだしたりしていました。

そのうちに、先生も、ふとんをかついできました。雨びっしょりでおばけのようでした。

おっかなくなってしまいました。

えびすやのおばあさんたちも、ひなんしてきました。おっかなくなってわたしとふみえはないていました。

よるになりました。ごはんをたべるとき、あきえは一ぱいもたべませんでした。おばあさんはなきながらたべました。

そのうちに、北がいとがかじになりました。ねつとおもってよこになったら、なぎがきました。わたしたちは、また、うちのほうへにげました。

あさになりました。川のむこうで、ひかげのちゆきさんたちは、おはかににげていました。とくのりさんたちが、はしごをかけてすくってやっていました。

わたしも川のむこうへわたりたいと思いましたが、まえの川がひろくて、はしもながれちゃってわたれません。

そのおひるごろ、しろうくんたちがきました。まさしくんも、よしあきくんも、あかんぼうもきました。山をとおってきたんです。

わたしは、ちょっとはづかしかった。ひるをたべていたら、山口やのおじさんがきて、山口やの方へわたらんかとききました。わたしはかんがえて「いく」といいました。わたしは、かすが先生におんぶってもらっていきました。みつえおばさんが「あきえよくきたね」といった。わたしは「うふふ」とわらいました。

それから、さとみをつれて、上すがぬまへいきました。先生たちや、めぐみさんや、おともだちがいっぱいいたの

で、はずかしかったけれどもうれしかった。みんなであそびました。

がっこうにいってみたら、がっこうはこわれて、つちがいっぱいで、つくえやこしかけがにわにころがっていました。まだがっこうは、はじまっていなかったので、みんな見にきていました。

ヘリコプターがきたので、手ぬぐいや、しんぶんがみをふりました。

註 [redacted]さんは、[redacted]の長女で、小学校一年生のとき中村耕地にあった「[redacted]」で被災した時の記録である。

[redacted]は当時、四徳川の本流と県道を西にへだてた川ぞいにあり、四徳川の増水によって、いくばくもなく床下に浸水し蔵や家屋が危険になった時の様子が細かく記録されている。

この近隣の人々は西側の小高い山肌にある四徳神社に多数避難して二十七日の夜を過したようである。

記録の後半は、災害の当日では無く、何日か過ぎた日の事であるように思われる。

(三) [redacted]さんの手記（原文のまま）

六月二十七日前夜来の雨は朝になってもその勢いは衰えなかった。然しこの位の雨はそれ程珍しい降り方でもなかったので、未曽有といわれる程の大災害が間も無く私共を襲うとはつゆ知らなかった。

この日、二時頃、私は用事があって川向うの「[redacted]」へ出かけた。

午後四時少し前であったろうか、突然、ハンノイリに大きな山崩れが起った。つゞいて東側の番場入川が崩れ出した。湯の沢まで流れ出した。この異変に、「[redacted]」の人々も誰もが一瞬、色を失ったようで皆外へ飛び出してみた。

私も家が心配だったので、皆が止めるのを振り切って出かけたが、この頃はもう、四徳川の川幅は何時もの二、三倍にひろがり、土砂や、立木などが流れてきて橋を次々に押流していた。

私は、ようやく下の橋を廻って渡る事ができたが、水をかぶったこの橋も私が渡り切ると同時に濁流に呑みこまれてしまった。

中村の方では、ものすごい濁流で田畑が流され、家も危険となり、どこかへ避難をはじめていた。少さい川も水かさが増して溢れ出し、道も川になってものすごく流れていた。

ようやく家（[redacted]）へ帰った私は、すぐ仕度をして、

床下をえぐられて危険になった、「[redacted]」へかけつけて避難の合図をした。

この時、すぐ近くの「[redacted]」へ山崩れがおそってきた。「逃げろ」と誰かが叫んだので、私は夢中で家へとび帰った。

外はまだ明るかったがこの分では今夜はゆっくり御飯もたべてもいられないだろうというので、ローソクの光で夕御飯をたべた。何だか空恐ろしい気がして食事ものどを通らなかった。

幸いな事に今夜は泊り客が一人もいない。この頃雨は一層強くなり雷も鳴り出し、また各地で山崩れがはじまっていた。既に、白壁のはげかけた「[redacted]」が濁流におし流されはじめたのが見えた。

父は、こんな晩に風呂へゆっくり入るのもよいものだなどと言って一風呂浴びて汗を流し着替えていたが、夕食後は部屋へ入って横になっている。

私も、何かしら怖かったので自分の部屋へ帰らずに父といっしょにいた。母は一人で心配気に茶の間でローソクを立てて起きていた。

有線放送はすでに四時半頃には入らなくなっていた。電灯線も故障をしたらしく電灯もつかない。テレビもラヂオも聞けないので他の様子が全くわからない。心細い思いをしながら激しく降る雨の音と雷鳴と、山崩れの音に聞き耳をたてているよりほかなかった。

その中に起き出した父が「お宮へ避難した人達がえらい大きい焚火をしているよ」というので、起き出してよく見ると、それはお宮ではなくて、実は「[redacted]」か、[redacted]さんの家が雨の中で燃えているところであった。

「[redacted]」付近の地形は山崩れの為にすっかり変って見えたのである。火焔は大きく燃え上っているのに誰一人として人影は見えない。知っていても雨と水と、ひっきりなしに起る山崩れのために助けに行けないのであろう。この時、頭の上の掛時計を見ると午前一時を指していた。私の腕時計は三時半で止まっていた。

ふと庭先きを見ると真黒いものが見えた。何だろう、熊でも出てきたのだろうかと思った。いくらか、その黒いものが動くように見える。驚いて懐中電灯で照して見ると熊では無く、庭の真中に大きい穴がぽっかりと口を開けていたのである。その穴が次第に大きくなりそうである。大変だ、後から山崩れが起きると、家もろ共にこの穴の中に飲みこまれてしまうだろう、そうなると助かりようもない。

父と母は、すぐに外へとび出して、昨日買ったばかりの

山と積みあげられている薪をその穴めがけて投げこみはじめた。雨は相変らず降り続けている。

私は、茶の間にいたが怖しさに身震いが止まらなかった。それでも身仕度をして、靴下をはいていると、突然母がパッととびこんできた。途端に私の坐っている所から見える玄関の両側から、壁を突き破ってタンスがとびこんできた。

あっと思った瞬間、目の前に父の顔がチラっと見えた。しかし次の瞬間にその姿が消えてしまった。

母は、すぐ裏庭へとび出した。私も続いてそのあとをおった。家の両側の山がぬけて出たのである。

私と母は声を限りに父を呼びつゞけたが、父は影も形も見えない。けん命に探していると、西側にあった木小屋が土砂で押しつぶされており、その中から、かすかに人の声らしいものが聞えた。

私と母は必死になって、つぶされた木小屋をもちあげると中から父の姿が見え、声にならないような声で呼び続けていた。顔に怪我をしている。

どうやって、あのつぶれた木小屋の中から父を助け出す事ができたのか今考えてみてもわからない。あの時、両親共に外にいたのであるが、何で、母だけが家の中へとびこんできたのか、それもわからない。

父は、あっという瞬間に木小屋の中へ吸こまれて土砂に埋まり、その上へ木小屋がおしつぶされてきたのである。

数日後に、その木小屋を若い人達数人で持ちあげてみたがビクともしなかった。あの時どこから、そんな力が出たのか今でも不思議である。

不思議といえば、私の座っている両側からタンスがとび出してくるのが私によく見えたことであり、もう一つは、父の顔が瞬間的ではあるが見えた事である。

母はその時、足に五針ぐらい縫わねばならない怪我をしたが、傷がふやけていて切り直しをしなくてはならないと言われたが、とうとう縫わずに治したが、いまだに足を引きずっている。

家の中は危険というので、怪我をした父をつれて裏山へ避難をする事にした。

頭と顔に大怪我をした父を、風呂場で手当てをしたが出血が激しく、顔色は青黒くなり見るも無惨である。

とりあえず、毛布を三枚もって裏山へ登ることにした。不思議なことに真暗やみであるのに、私には、これまでの事がよく見えていた、然し、暫くして途中まで行くと真暗になり何も見えなくなった。道らしい道も無い急な山を、父をつれて登るのは大変であった。押したり引いたりして

ようやく松の大木の下まで辿りつき、毛布をしいてその上に父を寝かす事ができた。

出血は依然止まりそうもない、顔色は益々悪くなり、それに時折けいれんさえ起る。私達はもう駄目かと観念をした程であった。

こうして私達は手の施しようもない父の傍で夜の明けるのを持った。雷鳴と山崩れの音は狭い谷間に反響してもの凄い。雨は更に激しく一向に止みそうもない。山鳴りがするとあちこちの山々の中を電灯や提燈のあかりがとぶように左右に動く、多分家を流されたり壊された人々が山へ避難する火であろう。

いつの間にか履いていた靴も靴下もない裸足である。下着まですっかり濡れ通ってしまっている。その中に疲れと寒さの中で睡魔がおそってくる。しっかりしなくてはと思うけれども、何時の間にか、すーっと気が遠くなり、どこかへもっていかれるような気持になる。こらえるのが容易ではなかった。（後略）

註　[redacted]さんは[redacted]の娘で父母と共に鉱泉経営の手伝いをしていて被災をされた。歴史の四徳鉱泉終末の記録とでもいえるものである。重傷の[redacted]さんはその後自衛隊のヘリコプターで松川町の病院に急送されて一命をとりとめる事ができた。

記録の最初の所の四徳川の荒れ出した時刻については少しずれがあり、午後三時頃の事ではないかと思われる。

「[redacted]」から帰ろうとして、「[redacted]」の前の橋を見たが既に落ちており、仕方無く、「[redacted]」の橋をやっと渡る事ができたのか、或は、「[redacted]」の橋も既に落ちていて、「[redacted]」の前の橋まで廻ってやっと渡る事ができたのか、その辺の事情が明確でないが、何れにして、その何れかを渡る事ができなければその後どのような事態に直面したかわからない危機一発の所であった事がわかる。その頃、四徳川の荒れによって「[redacted]」の裏の川っぷちの所が崩れていて危険な事が川東に渡って裏側から見てわかったという事もわかる。

お湯への通り道が湯の沢の出水で川のようになっていた事もわかる。

[redacted]の建物は、庭や木小屋はぬけ落ちたけれども倒壊せずにその後今日も荒れ果て、草むらの中に外観は残存しているのである。

(四) 伊那毎日新聞、昭和三六年七月一日(土)所載

「一夜明ければ河原、変り果てた部落にボウ然、うえと恐怖に戦く、声もなくぼんやりする子ら、三日間途絶えていた四徳の表情」

駒ケ根署の根橋署長は、きのう二十九日、管内で消息を絶っていた地区の、中川村四徳、駒ケ根市中沢の災害地調査に二人の署員を同行して乗り出し、夕方帰ってから現地の状況を次のとおり語った。

一行は、駒ケ根市東伊那から中沢区中割で車を降りて、永見山～早草地籍までは道路を辛うじて歩いて行ったが、折草峠までは道路はズタズタ、山林の中をかきわけて峠についた。

折草峠に登って中川村四徳部落を見わたすと、部落のあったところは一面荒河原、青いものが少しも見あたらず、近ずくにつれて家の倒壊や、土砂と家の柱にはさまれて死んでいる人の姿が見られ、あたりは目を覆うばかりの惨状だった。そして付近の山林に退避している部落民をようやく発見した。

住民は、炭焼小屋や木の下などに青ざめた顔をしているがお互いに生き抜こうと励まし合っている。

子供達は空腹で泣き声も出ないのか、ぼう然としており、災害時の状況を聞いてみたところ、二十七日夜、十時頃から東西の山の方が無気味なうなりを立てている。ゴーゴーというような音だったという。約一時間もたった頃、ズズーと鳴りながら突然地震のように家が崩れ出した。各家とも、外にとび出したが豪雨のため付近一帯は真暗で、お互いに呼び合いながら着のみ着のまま付近の山林に逃げこんだ。

恐怖の一夜は明け翌朝（二十八日）になったが、家は流され、部落は後かたもないように一面の河原と化し、流れ出してきた大きな石が到るところに転がり、残った家も危険に頻しているので、家に帰ることもできないまま、炭小屋、高台の家に入って雨をしのぐ、雨の中を食糧運びにかかろうとしたが、肝心の農協の食糧倉庫も流されているので、住民は不安におののき、家族を失くして探し求めて歩く人、昨日までの山間の平和郷は一変して地獄と化したようだった。

いろり端で火をたきながら一家で集っている所へ、突然山津波がおそって家を押し倒したため、家に火がつき六人全員が表に出られぬまま行方不明になった一家もあった。

二十九日までに、駒ケ根署に入った連絡によると行方不明者十一名、死者七名だったが三十日になって行方不明者

のうち、伊那バスの運転手一家四人は生存していることがわかった。

(五)　信濃毎日新聞、昭和三十六年七月一日所載

――水禍の伊那谷をゆく――

豪雨で孤立状態となった、上伊那中川村四徳、桑原地籍の被災者を救うため三十日ヘリコプター二機が出動、大がかりな救援物資の空輸をしたが、空からみるこの地区の災害状況は予想外に大きく、三日間災害地に閉ぢこめられた被災者たちは空からの救援物資に群がるようにとびついた。

救援物資を積んだヘリコプターは山間の部落に爆音を轟かせ乍ら山の尾根をはうようにして舞い上る。四徳川は激流で、フチを削り取られ川幅は平常時の三、四倍にひろがり百米余となり、永々と続く川の両側は無惨におしつぶされた民家が各所に点在し、被災者が手や衣類をふっている。この衣類は水魔とたたかったあとをうかがわせるように泥まみれ助けを求める必死の表情が見うけられた。

民家の密集地にコイノボリを吹き流しかわりに立てて、被災者の外、自衛隊員、消防団員が待ちかまえていた。

ここで、ヘリコプターは、材木を並べた急造の発着点に降下し、救助物資と、慰問の手紙を手渡した。空輸作業は夕方まで続けられて帰りには、全身打撲傷などの小松磯男さん等二人の患者を下伊那松川町の医院におくりとどけた。

(六)　読売新聞、信越版、昭和三十六年七月二十七日(木)所載

――いつかえる平和な村に、伊那谷水害から一か月、家は倒れ、道破れたまま――

――深いタメ息、泥田にマメをまく――

ここは〝陸の孤島〟被害激じん地の四徳区道路が寸断されていまも応急的に架けられた細い山道が一本通じているだけ。平家の落武者が住みついたという四徳へは、村役場から十四キロ、その県道はいまだにズタズタ、陸上自衛隊の道標をたよりにガケ道を進む。赤ハダをえぐりとられた無気味な源平地山が行く手にのしかかってくる。

四時間後にたどりついた四徳区は、この山の谷底の部落だ。八十三戸の平和だった村落は一瞬にして十七人の死者行方不明者を出し八割の住家が全壊した。

家も、美田も河原に一変跡片もなくなっている。いまは川幅三～四米の小川に水がチョロチョロと流れていた。

この四徳川が十数倍にもひろがって暴れまわったとはとても想像がつかない。辛うじて残った家には、住む家を失った被災者が、二～三世帯ずつ共同生活をしていた。

災害救助法で貰ったナベカマの外はほとんど身一つだ。何から手をつけて良いのかわからないといった表情だ。

土砂と流木でいっぱいの中川東小四徳分校を左に見て河原を登ったところで働いている農夫にあった。泥で埋った水田にあきらめきれず稲をぬいて豆を植えていた。

災害対策本部であったという農協支所を訪ねると倒れかかった建物がそうだという。

いつ道路が復旧するのか見通しはなく、あすのパンに困る二十六世帯が生活保護を申し出ている。また、八十三戸のうち、三十二戸が移住を決意し、移住先は、駒ケ根市が多いという。

小松区長は「林業が六〇パーセント、農業が四〇パーセントで年間三千二百万円の収入がある。山林は一戸平均十二ヘクタールあって、四徳に残っても暮せる。だが、木材薪炭の搬出も道路が開かなければだめだ」と、ため息をつく。

これらの諸記録は、何れも災害当時の有様を伝えるものであるが、これ等がその総てではなく極くその一部分であるけれども三六災の水魔の未曽有の惨状がこれらの資料から推察をする事ができるのである。

約六百余年にわたる永い歴史の中で、祖先の人々が営々として切り開き、築きあげてきた四徳部落は、この三六災を受ける直前は、人口が約四五〇人で九三世帯、八四戸の住民が住みつき、水田が約二十四町歩、畑が約二十九町歩の農耕地合計約五十三町歩余を耕し、更に私有林約二千五百町歩、区有林百十町歩という山林資源をもつ山村の集落であった。

これらの農耕地からは、米が約二千俵、生繭も約二千貫、雑穀類約百俵、コンニャク約五百俵、木炭約三万俵を産出し、山村ではあるけれども、働きさえすれば充分に生活のできる条件の桃源郷であった。

この桃源郷が、想像を絶する約一日に降雨量五百ミリメートルという集中豪雨に洗われて無惨に破壊されてしまい、その損害は約九億円余という巨額にも達したのである。

四徳の谷間に祖先の人達が鍬を入れて住みついてから、おそらく数え切れない回数の大満水に遭遇して、その被災の度に力強く立ち上り、むしろ、禍をもって福となす努力を忍耐強く繰かえしてきたという事が想像されるけれども、この三、六災の被害が従来の大満水の何れよりも大規模なものであって、まさに、「有史以来未曽有の災禍」という表現そのものであり、その為に、永い集落の歴史に終止譜をうたねばならなくなってしまったのである。

故郷を捨てて、故郷を去らねばならない苦痛は、その事を体験した者だけしかわからない、たとえようもなく、表現する事のできない深く、限りない悲痛である。

私たち、四徳住民は、一人残らずが大自然の脅威の前に人間という存在がどれ程のものであるのかという事を身を以って尊い体験をし、自然をあなどってはならないという尊い試練を受けたのである。他郷で新しい生活していく中で、この災害の教訓を、これからの生涯に、生かしていかなければならない。

三話　災害後の救援活動

夢にも思わなかった大天災のために完全に叩きのめされてしまって、茫然自失の部落に対して、翌日の二十八日から、早くも、村当局をはじめとして県や国の、災害直後の応急対策と、救援活動の手が、次のようにさしのべられたのである。

六月二十八日　十二時四十分、中川村に対して「災害救助法」が発令された。

六月二十八日　自衛隊松本連隊の隊員四十九名が葛島、桑原方面へ出動し七月二日に帰還

六月三十日　長野県チャーターの朝日ヘリコプター二機が飛来し、中川東中学校校庭を基地として、七月一日以後四徳方面へ救援物資の空輸を続行する。

七月二日より七月九日まで、高田連隊が五十名四徳に入り、道路橋梁などの仮設作業を行い、応急的に駒ヶ根方面より自動車が四徳に入れるようになった。

七月五日より自衛隊のヘリコプターが、毎日三機ずつ四徳、桑原地域へ、食糧等救援物資の輸送を続行し、総計二三、六七一キログラム約（一、五〇〇貫）の物資輸送をする。

四徳のヘリポートは、農協支所南の河原に仮設された。

当時の中川公民館報「水害日誌」から災害直後の救援情況を見ると次のようである。

中川公民館報「水害日誌」

六月二十九日　役場職員及び消防団が連絡並びに救助活動に入る。四徳方面調査班帰庁しての報告によると、道路は寸余も無く、全部が川となり、詳細は不明なるも、危険をおかして大体の被害状況が判明する。被災は言語に

絶する悲惨な状態であると。

六月三十日　雨はあがり久しぶりに輝く太陽をみる。午後は俄雨。朝日ヘリコプター午前十一時過東中学校校庭に到着、直ちに活動開始、まず状況偵察を行い、滝沢、四徳、桑原へとび帰着(滝沢部落の状況判明する)。続いて救援物資が、午後坂戸橋の対岸に到着する。中継して役場に搬入する。県会議員数名視察に来村、村会議員も各被害地へ情況視察に行く。

七月一日　曇り後小雨雷雨午後になり曇後晴。郵便局簡易保険無料診療班来村。村会議員手分けして慰問視察に、戸枝村長ヘリコプターで四徳部落へとび、慰問と激励する。午後晴れ、再び朝日ヘリコプター二機により物資の全力運搬

七月二日　晴れ雷雨あり。待望久しき陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯部隊ヘリコプターが午前九時頃来村、大型機、小型機を交へ四徳方面を主として、救援物資の運搬、消防団員も救援物資の運搬に活躍する。又保健所の指示に依りて消毒活動を開始。地方事務所厚生課職員昨夜より来庁、物資配分荷造り徹夜で活躍。

七月三日　晴れたり曇ったり、時々俄雨、自衛隊ヘリコプター大型機、朝から救援物資の運搬に活躍。又防疫班を結成各方面に出動消毒に当たる。

七月四日　雨断続、消毒班、保健所の職員等も今日も各方面の消毒にあたる。一方信大医学部一行四徳へ行き医療防疫に活躍する。中村建設大臣災害地視察の為に来伊、戸枝村長陳情の為に飯島町へ。

自衛隊ヘリコプター三機四徳、桑原方面へ救援物資の運搬、重病人の救出などに活躍し、七月九日までに連日、食糧、医薬品及び救援物資の運搬に活動、罹災地住民に大きい安心感と疲労困ぱいの中から起き上らんとする勇気を与えられた事は、村当局は勿論、一同感謝の念でいっぱいである。

災害当時中川村農協四徳支所の小松常務理事の四徳地区に於ける「自衛隊の救援活動」に関するメモによると。

六月二十九日　新潟県高田市の自衛隊第二普通科連隊第五中隊長水野洸氏、第六中隊長関政吉氏以下四十九名が中沢方面より仮設道づくりを始める。区長外五名案内に行く。決死的作業に驚く。架橋十一ヶ所。

六月三十日　午前七時寺村の[redacted]外行方不明者の発掘に当る。隊員二十七名にて、午後三時、四人を掘り出

す。悪臭甚だしき為に酒少量を出す。

[redacted]さんの遺体発見の付近を、[redacted]の遺体を探して下流地籍を発掘したけれども手がかり無く、止むを得ず捜索を中止する。自衛隊員の残余者にて、農協より下の仮設道路をつくる。架橋七ヶ所。

七月一日　道路仮設、架橋、死者の発掘作業を続行する。土砂の深い所は一米以上掘り下げる。この作業で発掘されたのは、[redacted]の[redacted]さん、[redacted]さん、[redacted]さんの各遺体である。[redacted]は依然として不明。朝日へり農協上米一包、医薬品四包、日用品五十二個を輸送してくれる。

七月二日　自衛隊の大隊長二等陸佐大塚泰一氏へリコプターにて来所、全部の打合せをなし本日中に全四徳の仮設道路を完成すべしと決定。道路の手直しがなされ、中沢桃ヶ平より下村の田打ガタオまでの仮設道路が完成する。重傷者の[redacted]両氏を松川町中村病院に入院のためへリコプター輸送をする。

自衛隊の大型へリコプター午前九時三十分より七往復してくれて、カンパン三十一、地下足袋二十足、医療品一、学用品一、味噌十六樽、郵便物、トランジスターラジオ一を輸送してくれたので、各耕地総代の手で各戸に配布する。

七月五日　自衛隊大型へリコプター午前九時三十分飛来して、米三、一八〇キログラム、医薬品四五〇キログラムを輸送してくれる。

七月六日　自衛隊大型へリコプターが米二二五キログラム、医療品二〇二キログラム、小松磯男氏の所へ布団と日用品を輸送してくれる。自衛隊再度来訪、前時仮設工事の補修及び危険個所の復旧工事、護岸工事の作業をする。

七月七日　通学路の危険個所復旧、危険家屋に対する必要な作業が行われる。

八月八日　前日に同じ

七月九日　小川内洞の外桟道の仮設作業、案内六名。

へリコプターによる救助活動の実動機数と自衛隊の出動状況を当時の資料によって見ると次の通りである。

○へリコプター実動機数調

中川東中学校基地、第一航空隊、第一へリコプター隊

七月六日　（実）13　（延）23
七日　〃　6　〃　11
八日　〃　4　〃　9
九日　〃　4　〃　12

十日　〃　3　〃　6
合計　〃　30　〃　61

○自衛隊出動状況

六月三十日松本連隊四十九名中川村救援に入る。
七月二日　松本連隊、朝離村する。
七月六日　高田連隊五十名四徳に入り道路工事、遺体発掘作業に当る
七月九日　高田連隊、離村する。

住民にとっては、全く寝耳に水のような、予想もしなかった大災害の襲来で、部落全体がどん底に突き落され、何をする事もできず呆然としてしまったけれども、災害の一日後の六月二十八日には、早くも、中川村に対して「災害救助法」が適用されて、国や県などから直接に救助を受けられる事になり、村当局、消防団などの適切で、積極的な救援活動が進められて、打ちのめされた四徳区の住民全員が、救助の手にすがって立ち上がる事ができたのである。「災害救助法」が適用されると共に、自衛隊や、ヘリコプターによる救援活動が活発に進められて、九死に一生を得た住民は、その力強い活動に感謝しながら、再生の意欲を振い起し、徐々に生気づいて、復興への足固めをしたのである。

この間、国や県の諸機関は勿論のこと、全国各地の人々から寄せられた、尊い物資や、激励の数々は、再起はもう不能であると思われた住民の心の強い支えとなった。一日も早く再起して、これらの人々の恩情にどうしても答えねばならないという心構えを固める心に変っていったのである。

自衛隊の隊員の献身的な活躍ぶりを目の前に見た部落民は深く感謝し、強い感動を覚え、作業を終了して帰隊する隊員の後姿を、両手を合せて拝んでお送りするばかりであった。

食糧やその他の救援物資を、ピストン輸送で山を越えて急造のヘリポートまで何回となく空輸してくれたヘリコプターの飛来は、被災直後の住民に落着きと安定をもたらしてくれ爆音を聞く度にその有難さがしみじみと身にしみ、地獄で仏に遭うような心境であり、文明の機械の有難さを痛感させられたのである。

未曽有の大災害に生活のすべてを失ってしまった四徳住民に、全国各地の、あらゆる人々からさしのべられた厚い愛情の救援の数々は、辛うじて生き残った部落住民のひとりひとりの人生観を全く変容させるような強い影響があり、一日も早く立ち直って、この深い恩情に報いねばならないと部落民一人一人が深く心に誓ったのである。

第五章　三六災後の四徳

未曽有の大天災である三六災によって、四徳という集落は地表から完全に姿を消滅するという悲しい結果となってしまった。

住民が一人残らず離散して他の地域に移住して廃村という全く予想もしなかった事態となった。しかし、全住民が、生れ育った故郷を捨てて、見知らぬ他の土地に集団移住をしなければならないという異常な事態は、簡単な経緯で進行したのではない。故郷を捨てきるまでにふんぎりをつける苦衷は暗く厳しいものがあったのである。

被災直後の四徳への連絡は、駒ヶ根市より折草峠を経て県道西伊那線が漸く自衛隊の努力の結果応急の仮設工事により通じたのみで、本村との連絡は、道路が全く不通で、仮設の不十分な桟道すら徒歩交通も困難な状態が暫く続いていた。

復旧工事の進捗もはかばかしくなく、四徳川の本線の復旧工事が三十六年十月から、部落の中央付近より着工されたけれども、初年度は、冬期間にかかった事と、セメント不足などの事情によって、思うように工事がはかどらず、三十六年度末になって漸く全体の二十パーセントができ上ったのみであった。

復旧工事に着工した当初の頃は、大部分の人達が四徳に留まって部落を再興するという気持であり、その事を強く

草に埋もれて立つ野ぼとけ
（下村、ねぎ山の下）

要望していた。しかし、日が経つにつれて、被害が余りにも激甚であり、山肌の荒廃もひどく、その後も急峻な山肌の崩落個所が発生する事もあって、このままでは何時、再び災害に見舞れるかわからないという事が深刻な問題になり、四徳に今後居住する事に不安感を持つ人々が日のたつにつれて次第に増加してきた。

部落の中に、荒廃した四徳に見限りをつけて、もっと安全な地域へ移住してはどうかという考え方が次第に根強くなり、そのような方向で将来の事を考える人の数が増加していった。

しかし、部落内には、被災程度の軽かった人達もあり、他地域への移住についてははじめ反対の意見をもつ人も相当数いた。

四徳から他の地区へ移住するためには相当の移住経費を必要とするが、災害直後の実態ではとても個人で移住費を用意する事は困難であり、若し移住するとすれば、多額の補助援助を何らかの形で得なければならないと言う事は明白な事実であった。

若し、四徳を捨てて他地域へ移住するとすれば、残されたひとつの道は、国の「集団移住法」に依らねばならないという事がわかってきたけれども、この問題についての国の指示事項には次のように規定されているのである。

「当該区域に住居又は農地を有する者の全員が集団的な移住（当該区域に農地を有する者が他の地域に住居を移すこと、及び区域に農地を有する者が当該農地の使用を廃することをいう）に同意しており、旦、他の区域に住居を移す者が5戸以上であること」

このような基準が明確に示されている以上四徳全体の住民が移住をするという事でなければ、移住に対する国の補助対称にならないという事もわかってきたのである。

全員一人残らず移住をするという決意をするまでには多くの日時を要したけれども、特に、部落の若者達の中に、部落の将来に対して悲観的な考えが次第に増加したために、もし、災害復旧によって部落を再建したとしても、これを受け継ぐ若い人達が移住を希望しているとしたら、四徳の将来はどうなるかというように考える人が多くなった。部落を再建する道より、移住する道の方が賢い道であるという結論が次第に強くなって全村集団移住という線が固まったのである。

三六災の二、三年前より、家庭の事情などで単独に四徳から他の市町村に移住をした人々もあり、この頃四徳の生活に対する考え方も時代の流れの底流に少しずつ動いてい

た（現在高度成長社会の波にとり残されつつある山村の実態に対する心配）という事もあったのである。

昭和三十七年六月にはようやく、全部落八十四戸の人達が、他の安全な地域に移住する事を決意して、村や県にその援助を求め、集団移住という、新しい、歴史の歯車が廻り出したのである。

四徳の災害復旧工事は三十六年度より引続いて実施されていたので、全部落集団移住という事になった為に、とりあえず建設省へ下協議を受け、工法や実施箇所等を再検討してもらい、その後の再調査を行って、状況変化に伴って不用箇所などは変更中止をして復旧工事を進める事になった。（参考文献～伊那谷三六災害復興感謝祭事務局著「復興の記録」）

集団移住という、新しい展開を迎えた部落住民は、それぞれ移住受入れ市町村の恩情に縋って、自己の希望する市町村に移住を決意して新しい第二の故郷に向けて、峠を越える計画に入ったのである。

やがて、それぞれに移住先も決定し、移住先の市町村の厚意によって、応急の住宅対策も用意されたのである。

駒ヶ根市では、四徳の罹災者のために、仮設住宅二十四戸を原垣外地籍に建設されて受け入れ態勢を整えて戴き、下伊那の松川町清泉地地籍、上伊那郡宮田村大久保地籍などに夫々移住の地区を整備して、用意万端あたたかい受け入れの手をさしのべていただいた事は深いご配慮とご厚情によるものであり、感謝のほかはないのである。

各市町村から援助の手をさしのべて戴いて次のような移住先が夫々決定したのである。

駒ヶ根市

[redacted]

[redacted]

上伊那宮田村

[redacted]

下伊那郡松川町

[redacted]

[redacted]

伊那市

[redacted]

上伊那郡飯島町

[redacted]

上伊那郡中川村

[redacted]

諏訪市

[redacted]

塩尻市

[redacted]

愛知県

[redacted]

それぞれ新移住地に新天地を求めて、心中では後髪を引かれるような思いで四徳を後にしたのであるが、この「集団移住特別措置法」の適用を受ける事ができて、移住地で新生活を営む土台ができた事は本当にありがたい事であった。

集団移住時における四徳区の共有財産の処理については、平等配分をするべきであるという区総会の決議に基づいて

次のような処理がなされた。

(一)　山林の処理

竜ヶ樽、角石、笹ノ尾、岩倉、白カバ、黒尾、小黒尾、峠の沢、源平地、大笹平、蔵東、蔵本、泥久保、東平鈴、馬捨場、つつみや沢、なぎ沢等の区有林は売却処理をされた。宝蔵るり庵等も国又は個人に売却処理された。

(二)　記念碑の建立

左記売却代金のうちの三十万円をあてて災害移住記念碑を建立し永久の記念とする。記念碑は、高さ二、五米、幅一、二米の仙台石にて、四徳神社の境内に建立した。

碑の表面は「災害移住記念碑」長野県知事西沢権一郎書。碑の裏面には「昭和三十六年六月二十七日豪雨災害に遭ひ、集団移住特別措置法に基き、国、県が耕地、宅地を一括買上げ四徳部落は四百年余の歴史に名残りを告げ、全戸他へ移住せり、時に由緒ある左記のものを共有地として存置す。四徳神社境内及山林、七十五社山神跡山林、湯の権現境内及山林、剣滝不動尊境内及山林、右管理者後記委員五名、中川村長戸枝馨撰」と書かれている。

(三)　福泉寺跡の碑

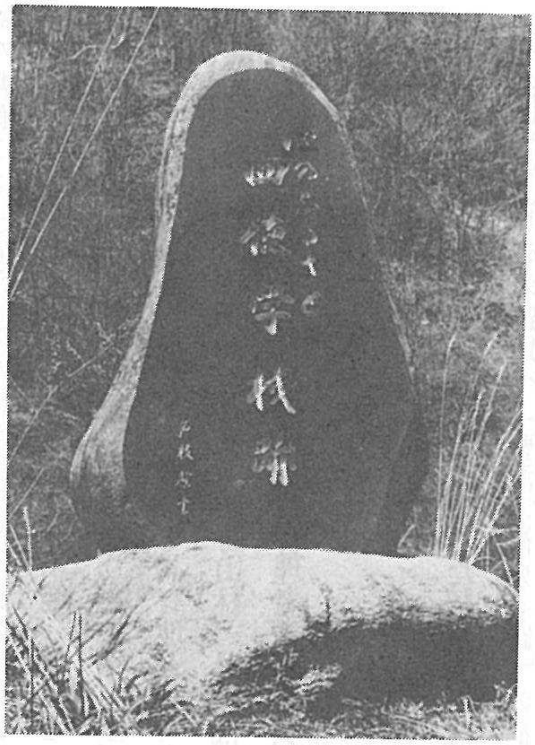
部落の集団移住により、災害で流失した福泉寺も廃寺となり、檀徒により寺の跡地へ「曹洞宗福泉寺跡」の碑が建立された。

碑の裏面には次の碑文が刻印されている。「当山は常泉寺四世水山寿泉和尚を開祖とし寛永十七年十一月四徳に寺宇を建立し法灯を伝えること三百二十余年該地一円仏教と文化の中軸たりしも昭和三十六年六月二十七日豪雨災害に遭ひ全檀徒他に移住茲におわりぬ伝えて以て薫香を永世に留む。常泉寺二十六世泰寿撰」

(四)　学校跡「ふるさと」の碑

集団移住により四徳を去り、各市町村に離散した四徳出身者の有志による、四徳学校同窓の集いが度々もたれて懐旧談に時を過し、時には恩師を招待して、往時をしのびながらお互いに励まし合ってきた。

昭和四十七年の集いの折に、四徳学校跡が段々時を経るにつれて不明になりつゝあるので、学校跡に記念碑を建てて、我等の心のふるさとである四徳学校を永久に忘れないようにしようではないかと言う事を話しあった。その実現について実行委員会をつくり準備を進めていたところ、話が広がり、四徳人会の事業として、元区民の有志の総力で記念碑を立てるようにしたいという話がもち上り、同窓の集いの参加者もそれを了承した。元区民の会である四徳人会の手によって記念碑を建立する運びとなり、関係者の熱意



分校跡にたてられた
「心のふるさと」の碑

によって遂に、昭和四十九年六月九日の吉日に、元四徳分校校庭の西隅に立派な記念碑を建立し、元学校の先生方、元区民多数の参加を得、中川村村長宮崎昌直殿を始め助役、収入役、教育長、上伊那教育会長木下衛先生など多数の来賓の参列を得て盛大裡に、除幕式を行い、碑前において盛大な記念祝宴が催された。

○碑の前面

「心のふるさと

四徳学校跡」

戸枝馨書

○碑の裏面

「明治七年十月一日第二三区一小区四徳三楽学校として開校し、昭和三十六年六月未曽有の梅雨前線集中豪雨の大災害を受け部落全住民集団移住により閉校するまで、約一世紀の間四徳住民を育てた教学の場所である学校跡に記念碑を建て、これを記念する。

昭和四十九年五月三日

四徳学校同窓会

有志一同之建

翌春、碑の両側に「ぼたん桜」の苗を十二本植樹し、翌々年には更にその周辺に、檜の苗を植樹して、この碑の周辺を整えた。この「ふるさと碑」建設に要した費用の約五十万円は、四徳出身者及び、四徳学校に勤務された先生方など有志のみなさんの寄付金によるものである。

記念碑の建設について、信濃毎日新聞は、四十九年六月七日㈮の生活圏版（南信）で次のように報道している。

「学校跡に記念碑」集中豪雨禍で離散の中川村四徳人会。九日の除幕式で再会。

三十六年の集中豪雨で集団移住した人たちでつくってい

る上伊那中川村四徳の四徳人会[redacted]は、生れ故郷をいつまでも心に残そうと、小、中学校跡に記念碑を立てたほか、二年がかりで四徳史の編さんも手掛けている。記念碑はこのほど完成し、九日午前十一時から学校跡地で除幕式を行うが、この日は災害で離ればなれになった四徳出身者が一堂に会し旧交を温める。

四徳区は、中川村の中で最もへき地と言われ、平家の落人が住み着いたのが始まりと言い伝えられる古い集落。昭和三十六年六月の集中豪雨災害で死者七人、家屋の流失、全壊が五十二戸の大被害を受け、当時住んでいた約百戸、五百人の住民は駒ヶ根市など平地部へ集団移住、数百年の歴史に終止符を打った。

散りぢりになった四徳の人たちは四徳人会を結成して、なにかと励まし合って来たが「人がいなくなった四徳でも、心は残っている」との気持ちが強く、災害後十三年にして記念事業に取りかかった。

その一つは、中川東小、中の四徳分校跡地に記念碑の建設、現在、県教委松本教育事務所学校教育課長の小松谷雄さん（五三）＝駒ヶ根市（記念碑建設委員長）が同窓生に呼びかけて、四徳出身者二百二十人から百二十五万円の寄付を求め、このほど完成した。

碑は自然石を築き石の上に立てた高さ約三メートル「心のふるさと四徳学校跡」と刻まれている。建設費は約五十五万円。

四徳分校は、明治六年「三楽学校」として寺小屋方式で始まり、四徳の教育文化を育てて来た歴史をもつ。小松谷雄さんは、「建設が実現したのは、同窓生の心が今も一つと言える」と話している。

一方、四徳史の編さん事業も始まった。内容は、地理、歴史、教育文化などにわけて記し後世に残そうというもの、完成までに二年かかり、事業費は寄付金の一部などをあてる。

「集団移住特別措置法」に依って四徳から離村する住民に対して、四徳部落の農耕地及び宅地は総額約四、〇〇〇万円で県が買収してその代金を区民に支払ってくれ、それを移住費にあてる事ができたのであるが、尚、その外に、集団移住法による金額の支払いや、村や区などから次のような金額をおくられたのである。

○集団移住法により一世帯十万円一人二万円
○中川村より見舞金一世帯二万円
○四徳区有財産処分代金としての配分高、一世帯十万円余

先祖伝来営々として山野を拓き農地をつくり、田畑を耕して、力を合せて守り抜いてきた四徳という集落は以上のべてきたように最終的な財産処理も終り、住民は夫々志す市町村に安住の地を求めて移住して、一軒も人家を残さない原始の姿にかえってしまったけれど、四徳に生れ育った人々にとっては、やはり、永久の、「心のふるさと」としていつまでも変らぬ心の支えであり、ふるさとである。

風化して、徐々に原始の姿に戻ってしまっても、誰にもこの地を荒されたくないという想いは四徳に生れ育った者たちの悲願でもある。

四徳川のせせらぎの音は、いつまでもこのままで谷合いに静かに響いていて欲しいと願う心は切々である。

四徳の最後の区長として区政を担い、区全体の後始末を立派にしめくくってくださった小池正氏の手記に依り、四徳の終末を次のように見る事ができる。

「四徳最後の区政を担って」

私が四徳区の最後の区長して区政を担当したわけで、四徳区政の最終段階の状況を想起し感慨深く、今更に望郷の念にかられるわけです。

村外れ南端の野ぼとけ
（はじめ屋の上のところ）

昭和三十六年の十二月の年末には、区総会を開く会場も無く致し方なく土砂に埋まり、半壊状態の四徳分校の二階を借りて漸く区総会を開く事できた。

この区総会で、明三十七年度の四徳区の方針や対策などについて種々話し合い、新年度の役員を選出し、区長に小池正、区長代理に小松茂明、以下各役員を選出した。

結局この体制で二年間引続いて、昭和三十八年部落全体集団移住が完了するまでの二年間、永い歴史の続いた四徳区政の最後を担当し幕を閉じる仕事をさせていただいたわけである。

以下、四徳区政の終幕段階における二年間の想い出を辿りたいと思う。

昭和三十七年一月の区の新年総会は、営林署の官舎を借りて開いた。出席できたのは約五十名で、主に、今後の重大問題である、移住の問題や、農地の買上げ促進等について話し合いこれからの区の在り方等について具体的な研究や相談がなされた。最後に簡単な新年の宴を催し再起を誓い合った。

一月に入ると早々から、各災害対策関係の方々（代議士、林野庁長官、営林局長等その他）の来訪が続き、その人々との面接や応待に多忙を極めるようになった。

昨年度末頃より災害復旧工事関係者や工事人夫等が続々と部落に入りこみ、その数三〇〇名を越す有様である。

復旧工事は、本体工事（工事費約四億円）支線支流を除く四徳川河川及道路工事が年明けと共に本格的に開始されるようになった。工事受請人は、村上建設株式会社（本社東京）である。

共同墓地を守る野ぼとけ
（中村の西山、馬捨場に立つ）

二月に入り、売渡しを希望する者の山林を県有林として買上げて貰う交渉の為に、正副区長と委員五名が長野県庁に出向き、林務部長を訪ねてその旨を要請する。

然し、県としては要請に添いかねるという事で営林局長を紹介してくれる。その足で営林局長を訪ね、局長に面接して、国有林として買い上げて戴くように要請をして帰る。後にこの事が実現して、営林署で官行造林として処分してくれる事となった。

三月に入ると、移住者の動きが激しくなり一人減り、二人減りして部落の人々が、新しい移住地へ向って出て行く。一方、復旧工事はこれに反して賑やかになり、通路仮道への付け替えがしきりに行なわれ、移住者の家財道具等の運び出しが不都合になる事も多く、その度に、村上建設の事務所に交渉に行かねばならず多忙を極める。

四月に入り、伊那バスの本社に出向いて、バス運行中止と契約解除の申出をする。快く諒承してくれお互いの不運を慰め合う。昭和三十四年十一月に運行を開始した四徳路線バスも僅か三ヶ年で終りを告げる事となる。もう今後おそらく四徳行バスの運行はされないであろうと思うと淋しい

限りである。

このバスは、四徳まで是非バスを通したいという区民一同の非願のもとに、数年間にわたる協力と、そのために払われた犠牲によって漸く実現したものであるので極めて残念であるが致し方がない。今尚、折草峠の道路敷には、私共の汗と涙のかたまりの砕石や砂利等が沢山埋まっている事を思う時感慨深いものがある。

バス運行当時は駒ヶ根駅まで一日二往復、所要時間は一時間余、料金は大人一人百円であり極めて好都合であった。

五月に入ると、区有林字ハンノイリ大笹尾の約十八町五反九畝を、村有林として買い上げて貰う要望に基づいて、村の林務委員が現地視察に来たので、正副区長が現地に案内して説明をする。後日これは村当局が買い上げをして現在は村有林となっている。

区民の職業あっ旋の為に遠路を数回訪れてくれて熱心に就職の世話をして下さった、伊那職業安定所の係官の方々も希望者の就職先がほゞ確定をしたので、今月でその仕事を終了する事になった。唯感謝の外は無い。

六月、全戸集団移住が決定する。昨年より居住不適地として国の施策である「臨時措置法」の適用が講ぜられて、全戸移住の勧奨を受けており、区総会を開き、討議研究を重ねてきたけれども、結論として、今後の、教育、文化、医療などの諸般の事情から、子孫の将来の事を考慮した結果として全戸集団移住を決定して村当局に報告をする。

先祖以来永年暮し続けてきた故郷を捨てねばならないという事や、将来の生活の不安等もあって、根強い反対の意見もあって、全戸集団移住を決定するまでには幾多の紆余曲折があり簡単な筋道では無かった。

七月、愛知県岡崎市杉田石材店に、災害移住記念碑を注文の為に委員五名が出張する。中川村第二回の村長、村議選挙が施行された任期満了にて私が退任したので四徳最後の村会議員がこれで終った。永い間にわたって四徳区より選出された多くの先輩議員の功績は大きく数々の偉大な足跡を残された事を改めて深く感謝の念を捧げる次第である。

国より移住資金として、一戸十万円、一人二万円が交付される事となった。

八月、農地売渡しの登記が複雑をきわめ、思うように仲々進展せずに心配していたが、徐々に見通しがつくようになる。この間、飯島町の登記所に仁科氏と何回となく出張し、この事の早期進展に努力する。

役場へも泊りがけで出向き、売渡し農地の境界、河川敷、道路敷などの境界区別などの確定に多忙をきわめる。

九月、災害移住及、農地売渡等で大変にお世話になった下平直殿（現中川村収入役）や保健関係で限り無いお世話を頂いた、保健婦の吉村なつ子殿に、区より記念品を贈呈して感謝の意を表し、加藤医師を含めて慰労会を催し、これらの方々に区民の総意で謝礼をする。

十月、四徳分校では、遂に児童数が十五、六名に減少してしまったけれども、区で最後の秋の運動会を盛大に実施した。工事関係の村上建設の人夫の人達も参加してくれて、五人抜き相撲競技などを行い仲々賑やかな思い出深い運動会を終了する事ができた。

農協支所跡にて、支所解散の会をやり、片桐安夫組合長が出席してくれて、詳しい経過報告があり、慰労会を行い万感胸に迫るものがあった。この頃は既に転出者が多く、出席者が少数であった事は止むを得なかった。

十二月、この頃には大部分の家が移住をしてしまい、四徳で役員会を開く事は不可能となってしまった。これからは、四徳の諸会合は駒ヶ根市で行う事とする。農地移動、登記移転なども殆んど終了したので、四徳選出の最終の農業委員を辞任する事にした。

三十八年度に入ると、二月には殆んどの家が移住先に転居し、残るのは僅か数戸のみとなり四徳にも淋しさが加わった。村上建設の復旧工事もその後順調に進み、本体工事は殆んど完了し、道路、河川、堤防など見事に完成した姿は災害前とは大きい変り様である。

工事人夫も順次引上げを開始した。私も、既に家族の移住している伊那市に引きあげる事になり、二月の真白に雪の降った寒い朝に工事用のトラックに乗って故郷に別れを告げる事となった。彼の朝の光景は永久に忘れる事はできない想出となった。

五月には、農地売渡代金を、南向農協の各人の口座へ振込み一切を終了した。

六月、駒ヶ根市農事センターにて、四徳区の総会を開き、今までの経過報告をして、共有山林売却代金を配分した。これが四徳区の最後の区総会となり粗宴を開き、互いの健康と再会を約して散会した。

八月、災害移住記念碑を、赤穂小林組の施行により、四徳神社の社庭に建立した。八月十日には四徳分教場が廃校となる。

十月、災害移住記念碑の除幕式を、現地の四徳神社にて施行する。県知事代理を始め、戸枝馨村長以下来賓多数の参列を戴き、盛大裡に終了する事ができた。

移住記念碑
（四徳神社前庭）

戸枝村長が賤として贈られた詩

「部落ごとこぞりて去りし道辺に
　淋しげに咲くコスモスの花」

参集した区民一同この記念碑にすべての心を託して、お互いの無事を祈り故郷に別れを告げたのである。

想えば、大災害によって故郷を後に、異郷に移住してから早くも二十年の年月が流れて既に百名近い懐しい人達が幽明境を異にして語り合う事ができなくなって仕舞いました。

もう二、三十年もすれば、四徳の想出を懐しく語り合う事のできる仲間は僅かな数になってしまう事でしょう。そして、私共四徳人の子孫は益々繁栄していくだろうが、四徳に想い出をもち、故郷四徳を懐しむ人は年々さいさい少なくなり四徳とは無縁の人達が増加していく事だろう。

その時、故郷四徳は、山深い谷間の川辺に荒れ果て、山野の姿に変ってしまうだろう。それでも、四徳川のせせらぎは、永劫にその流れを続けている事だろう。

そうなった時に、彼の隆盛だった四徳を誰が想い浮べるだろう。その姿を今想像する時断腸のおもいにかられ悲哀の涙を流すのは私一人だろうか。

四徳の皆さんのいつまでも変らぬご多幸をお祈りして想い出の記録を終えます。

（昭和五十五年一月　元区長　小池正）